

平和を大切に

新潟県 上村 慶一

私が召集令状を受け取ったのは昭和十六年七月初旬であった。

かの関東軍特別大演習による動員下令で、戸数八百、人口五千の村で約五十人が同時召集された。私は高田東部六七部隊に入隊。大阪、釜山を経て、八月初旬、朝鮮羅南第四部隊三中隊に入隊。一期教育を終わって、十一月下旬、鮮ノ国境守備隊へ転属。日本海に向かつて国境を流れる豆満江の対岸には、昭和十三年七月、張鼓峰事件で有名になった張鼓峰を朝夕睨んでいた。

当時の国境守備隊には、静謐確保の大方針のもと国境守備制令も制定されていた。曰く「西水羅、甌山、咸林山、長堪山を連ぬる直線上以東の上空に対し射撃を禁ず」もその一カ条であった。

昭和二十年八月九日ソ連軍不法侵入の日、私は甌山にいた。午前零時過ぎ、突如越境飛行機の編隊が羅津、清津を反復爆撃、友軍の地上砲火照明弾で、昼を欺く不気味な明るさで戦端が開かれた。夜明けとともに友軍陣地も砲撃され始め、最寄りの洪儀駅―四会間の鉄道も爆破された。

私は朝から甌山山上の陣地に砲弾を背負って運搬していたが、敵機の低空からの機関銃掃射に作業は難渋した。薄暮とともに陣地配備に就いたのであったが、夜半、関東軍第三軍からの転進命令により、四年間守り続けた陣地を放棄、住み慣れた兵舎を後に、雄基を経て会寧方向に行軍した。道路上には日本人避難民が溢れていた。

平和な家庭から突然戦火の巷に放り出され、野宿を重ね、食糧もままならず、幼児は力尽きて亡くなり、軍隊のわずかな休憩時間に円匙を借りて我が子を路傍に埋めて避難を続ける婦人や、腰の曲がった老夫婦、作戦行動とはいえ、この人達を見棄てるかの如く行軍する軍隊がなんとも情けなかった。

八月十一日、江八嶺に到着、陣地に就き、ソ連軍の侵攻に備えて戦車攻撃等配備したが、敵の侵攻はなかった。

八月十三日、会寧付近へ転進の途中、元山洞部落の小高い丘に部隊の護衛尖兵小隊として配属された通信隊とともに残り、十六日、連隊命令により江八嶺、一里洞方面の敵状搜索に五人で午前九時出発、日没前、一里洞到着。幸い敵の侵攻はなく、翌日九時、元山洞に帰着した。一里洞では空屋に一組の日本人夫婦が突然のお産のため避難をあきらめていた。

十七日、部隊命令により元山洞出発、会寧を経て三合村部隊本部に十八日到着、武器を放棄した。

八月二十二日、会寧河原部隊以下全部隊集結。ソ連軍の管理下に入り、軍隊機能を喪失し、強制抑留の悲劇、ここより始まった。

部隊長は、敗戦の精神的混乱を適切に收拾し、第三軍命令により間島の司令部に赴いた折すでに軍司令部の機能喪失と判断し、独断、部隊に帰還し、部隊の最後を見届けた。その責任感を今も思い起こすのであ

る。

強制収容所への行軍の途中、道端に幼児が捨てられて泣いていた。母親のわが子への最後の愛情であろうか、きれいな晴れ着姿、目、鼻、口には蠅が群がり、ソ連軍兵士が抱き上げて、折から通りあわせた朝鮮婦人に手渡すと、いやいやながら受け取る婦人。その後どうなったことであらうかと、あのときの情景が今も脳裏に鮮やかに映っている。

富寧収容所は工場の社宅と思われる建物で、まわりを板塀で囲み四隅に望楼が建ち、哨兵が塀より四メートル以内に近づくと容赦なく撃つ。塀から四メートル以内には粟の穂が実っていた。空腹のあまりこれに手を出し、銃殺された者もあり、その後もときどき威嚇射撃音が聞こえていた。

収容された部屋は、畳一枚の広さに二人で寝た。一部屋二個分隊三十人が入っての生活。各自、壁際に頭をつけ觸を並べたように寝る。床はコンクリートに藎敷き、着のみ着のままのごろ寝。風呂はなくおのずからシラミに攻められることになり、発疹チフスが流

行。医療資材はままならず、四十度の高熱に喘ぐ患者に氷を包んだ手拭いを額にのせ、手まめに取り替えて、やるせない思いで見守るほか方法もなかった。犠牲となった遺体は屋外に並べ、十体を数えるようになる。と収容所外に搬出、埋葬した。十一月ともなれば凍土となり、埋葬のツルハシを跳ね返した。

食糧は極端に少なく、一日大豆一合弱の日が長く続いた。塩分も不足、よほど静かに立ち上がらないと目が眩んだ。やがて粃、雑穀、麦粉等支給されたが空腹を満たす量ではなく、皆栄養失調となった。野菜は皆無、壊血病患者多数、医師の指導で、全員が松葉を噛んで凌いだ。

富寧収容所に入った当初からソ連兵による略奪が始まった。「東京ダモイだから私物をまとめて屋外に集合するように」と言う。集まると、検査の名のもとに万年筆、時計、鉛筆等、略奪の限りを尽くす。終わると元の生活に戻るのである。「東京ダモイ」は日本へ帰ることの意であるが、移動するたび毎によく使った言葉で、五、六回も繰り返し返されると信用する者は誰も

いなくなった。

富寧収容所の越冬は昭和二十一年四月下旬で終わり、古茂山、クラスキーノを経て入ソ、白樺の密林に到着。ここに野宿しながら自分達の住む住居造りが始まった。白樺の丸太を組み合わせ、屋根は樅の木の皮を使い、床は丸太を並べて木の皮を敷き、その上に起居した。

作業は、道路建設工事用地内の原生林の伐採から始まる。直径一メートル以上の大木は爆薬を使って倒す。たまたま不発の爆薬に近づき爆発に遭い、不慮の死を遂げる者。鋸を使って伐採のとき、意外な方向に倒れた木の下敷きとなる者。厳寒時、防寒帽のため合図が届かず、傷つく者が続出した。次に、山の斜面を掘削して幅四メートルの道路を造り、さらに八メートルに拡張する。人員に応じてノルマが課せられる。作業時間中に終わらないときは夜の九時まで作業を続けさせる。時間中に終わらない見通しのときは早めに作業はほどほどにして、厳寒時等、手足を動かして凍傷を防ぎ、時を稼ぐのであった。

九月初め頃、コルホーズの使役作業のとき、空腹が長く続いていたとき大谷福蔵さんとコルホーズの倉庫内にある馬鈴薯を盗みに入ることにし、深夜、丸太の柵を越え匍匐して近づくとき監視兵が立っており、喫煙の火が見えた。さらに近づくときだしぬけに「ブウ」という。突然の低い声に戦慄した。干し草の中に豚が寝ており、接触したのである。そのまま静止していると、やがて豚も沈黙した。豚を迂回して倉庫内地下室に入り、馬鈴薯を麻袋に入れ、無事分隊に帰り、翌日、全員で束の間の満腹感を味わうことができた。

粟の穂のこと、馬鈴薯のこと、極限のとき、平和の環境では到底考え及ばぬ行動に走ることもあることを経験した。

昭和二十二年五月下旬、私は作業能率がだんだん落ちてゆくのをどこかしく感じていた。そんなある日、通訳の水谷泰二さんがソ連軍医大尉と収容所に来られ、私に以前のような仕事ぶりが見られなくなったこと、体調を整えてから頑張るようにと軍医の診断を受けるよう勧めてくださった。私は、一匹の蛇でも分け

て食べ頑張った分隊の人達と別れたくないと考えていたが、作業ノルマ達成には皆さんに迷惑をおかけすることも考え、受診の結果、即日入院と診断され、夢に見た祖国の土を踏むことができた。みな大勢の人様のおかげである。

あの北鮮の平和郷が地獄と化した八月九日、そして無辜の日本人老若男女の悲鳴は今も脳裏から離れることはない。何よりも平和を大切にと願うこのごろである。

それにしても、あの北鮮富寧の山中に眠る夥しい同胞の御霊、今こそ北朝鮮・日本両国政府、両国民の良識を総動員して、平和の陰に風化させることなく慰霊の方途を講じていただきたいと切に願っている。

【執筆者の紹介】

応 召 昭和十六年七月

復 員 昭和二十二年六月

極限の生活から生還して、三国山脈の北麓の魚沼の故郷に帰り父祖の農業を受け継いで、好きな俳句を友

として今日に至っている。上村氏の日経新聞の俳壇その他数多くの入選句を拝見させていただいたが、どうしても身に覚えのある句にひかれた。

○寒星や哨兵たりし日は遠し

○流星や異國の丘に見し記憶

北方鎮護の誇りは、やがて「異國の丘」の屈辱に耐えなければならなかった。

○蓬萌ゆ飢をしのぎし日は遠し

食える野草は総て目にとまる餓鬼の道であった。

○落ち葉ふむ音のとどきて嘶いみなけり

愛馬は主人の足音も聴き分けた。行軍中五分間休憩でも先ず水飼い、「馬は活兵器」と愛護されたが、武装解除と共に嘶きが荒野に消え、軍馬や軍犬には復員がなかった。

○牛曳いて枯野を急ぐこともなし

シベリア生還者も高齢化は避けられない。長寿に感謝して余生を全うしていただきたい。

(新潟県 山崎 菊司)

貴重な体験シベリア抑留

新潟県 高橋 吉郎

シベリア抑留は貴重な体験であると信ずるものである。この体験を後世に伝えることは最も大切である。再びこのようなことがあってはならないからである。戦争を体験しない国民に知らしめなければならぬと思う故に、体験者は自己の貴重な体験を黙して語らざることなく広く国民に知らしめなければならない、体験者の一人として痛切に思う次第である。

何事も原因なくして結果はない。シベリア抑留問題も第二次世界大戦の結果生じた、史上かつてない悲惨にして苛酷な戦争が終結してから起きた出来事であった。シベリア抑留問題が単なる戦争の悲劇として忘れ去られてしまわれては、また再びこのような戦禍が起きてしまうおそれがあると思われるため、このシベリア抑留体験記を書くことにした。